シンボリック相互作用論基本文献翻訳シリーズ　No. 3

自覚文脈と社会的相互行為(0)

バーニー・G・グレイザー，アンセルム・L・ストラウス[1]（著）
カリフォルニア大学サンフランシスコ校附属病院

山口　健一，鎌田　大資，桑原　　司（訳）

本論は「自覚[2]文脈」の定義と類型化を行い，それを研究するためのパラダイムを提供している。このパラダイムは，所与の自覚文脈から派生する発展的な相互行為プロセスを強調し，その文脈の変化に注意を向ける。４人の社会学者たちの著作や論考は，彼らが想定する自覚文脈のタイプと，彼らがこのパラダイムのどの部分を扱っているのかということ，この二点との関わりにおいてそのパラダイムの内部に位置づけられている。〔最後に〕今後の調査研究と理論にとって，このパラダイムが持つ含意について考察している。

人びとがお互いに向き合うとき，どの個人も，他者のアイデンティティや他者の目に映った自分自身のアイデンティティの何れかでも知っている，といつでも確信できるわけではない。一見して信頼できそうな保証が与えられているときでさえそうである。正直な市民が詐欺師に騙されているかもしれない。政府高官が，自分の秘書として身分を偽っている外国のスパイに騙されているかもしれない。あるいは終末期患者が自分の主治医に〔病状について〕騙されているかもしれない。しかし，詐欺師のカモは，実は，地元の探偵チームの一員であるかもしれない。また，〔秘書の〕スパイ活動を疑いつつも，その政府高官は，秘書に偽の文書をこっそり手渡しながら，何も気づいていないふりをしているかもしれない。そして終末期患者は，自分の本当の病状に感づきながらも，

---

[1] 本稿は次の論文の全訳である。Glaser, B.G., and A. L. Strauss, 1964, Awareness Contexts and Social Interaction, *American Sociological Review*, Vol.29, No.5, pp. 669–679.

なお，訳文中〔　〕は訳者による補足のための挿入を，太字で記されている箇所は原著においてイタリック体で表記されているものを，「　」は原著における“　”を，それぞれ表している。また脚注は全て訳注である。原注は本稿の末尾に配置した。

本稿の公刊に際しては，Carolyn Glaser と Bonnie Glaser の２氏より許諾を頂いた。記して感謝したい。Carolyn Glaser と Bonnie Glaser は，B. G. Glaser の家族で，現在，グラウンデッド・セオリー研究所を主宰し，Glaser の業績（http://sociologypress.com/book.htm）の普及・発展に努めている（http://www.groundedtheory.com/）。

Originally published under the title "Awareness Contexts and Social Interaction" and copyright © 1964 by American Sociological Association. Copyright © August 2nd, 2022, by Tsukasa Kuwabara, Professor at Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University.

[2] 本稿においては「awareness」に対しては，原則として「自覚」という訳語を当てている。この点については，本稿末尾の「訳者あとがき」を参照のこと。

主治医の前ではそのそぶりも見せていないかもしれない。このように，本当に「騙されて」いるのは誰なのかという問題は，その状況における当事者双方の自覚の問題なのである。

自覚という現象――それは相互行為研究の要となるが――は，少なくとも次の二つの理由からきわめて複雑なものになり得る。第一に，相互行為には，単に二人の人間のみならず，三人目あるいはそれ以上の人びとが関与するかもしれない。例えば，ある同性愛者が多くの異性愛者がいる前で他の同性愛者に合図をするとき，ある者はその合図に気づかないかもしれないし，またある者はそれを読み違えるかもしれない。他方でその意図した意味に気づいている者もいるかもしれない。従って，その同性愛者のアイデンティティは，一部の異性愛者たちには知られていないか，あるいはそうではないかと疑われており，また別の異性愛者たちには知られていることになる。逆に言えば同性愛者の方は，自分の本当のアイデンティティを，誰が疑っていて，誰が知っていて，誰が知らずにいるのかについて，いつも確信を持てるわけではない。第二に，関与しているどの人も，自らのアイデンティティと他者のアイデンティティを如何に扱うかに関して，特定の要件があり，そして恐らくはそうしたことに強い利害関係を持つ何らかのシステムの代表者である可能性もある。スパイと逆スパイは，医師と看護師と同じくらい頻繁に，そのようなシステムとつながりがある。

上記の考察は，相互行為と自覚の関係における重要な特徴を浮き彫りにしている。しかしながら，我々の基本概念を確立するためには，本論においては，最も複雑ではない状況，すなわち，相手の目に映った自分自身のアイデンティティと相手のアイデンティティの双方について確信を持つ，という二重の問題に直面している二人の相互行為者（個人と集団の双方を含む）に考察対象を限定せざるを得まい，と判断した。

自覚文脈

自覚文脈という用語で我々が意味しているのは，ある状況において相互行為者の各々が相手のアイデンティティと相手の目に映った自分自身のアイデンティティ〔の双方〕について知っている事柄の組み合わせの総体のことである(1)。この自覚の〔組み合わせの〕総体により，長い場合もあれば短い場合もある，一定期間にわたる二者間の継続的な相互行為が，その内部において方向づけられる文脈が生じる。経験的には，本当のアイデンティティの問題は，二人のうち一人のアイデンティティ――例えば終末期患者のそれ――にのみ焦点を当て〔て探究され〕る場合もあれば，双方のアイデンティティ――例えばスパイと逆スパイのそれ――に焦点を当てて探究される場合もある。

我々は，特に注目すべきものとして４つのタイプの自覚文脈を選び出した。というのも，この４つが様々なタイプの相互行為を説明するに際して有効であると判明したからである。**開放**自覚文脈は，相互行為者の各々が，相手の本当のアイデンティティと相手の目に映った自分自身のアイデンティティ〔の双方〕を知っているときに成立する。**閉鎖**自覚文脈は，一方の相互行為者が，相手のアイデンティティと相手の目に映った自分自身のアイデンティティの何れかでも知らない場合に成

立する。**疑念**自覚文脈は，閉鎖自覚文脈の一変種である。それは一方の相互行為者が相手のアイデンティティと相手の目に映った自分自身のアイデンティティの何れかないしは双方に疑念を抱いている〔場合である〕。**相互虚偽**自覚文脈は，開放自覚文脈の一変種である。それは相互行為者の双方が〔上記の二つのアイデンティティを〕完全に知っているにもかかわらず，〔互いに〕知らないふりをしている〔場合である〕。

上記の４つのタイプは，社会学者の見取り図が，二人の相互行為者――二人がどれほど情報に通じているか，あるいは専門家であるか否かは問題ではない――が持つそれとどのように異なり得るかを説明するものである。例えば，ある医師が，患者は自分が終末期にあるということ（＝医師の目に映った患者自身のアイデンティティ）をまだ知らない，と語る一方で，患者の方は，医師から伝えられている自分の病状をかなり疑っている，という状況があり得る。つまり，この場合，実際には疑念自覚文脈が成立しており，そこにおいて患者は自分の疑念を検証しようとしているにもかかわらず，医師は閉鎖自覚文脈が成立していると思っているのである。ここでもし，医師の方が患者のそうした疑念を認識すれば，医師は患者の疑念を払いのけようとするかもしれない。そしてもし医師が〔その結果として，うまく患者の疑念を払いのけることに〕成功したと思えば，〔調査を受けた際に〕医師は，社会学者に対して，患者が疑念を抱いていたという事実を述べずに，患者はまだ事実を把握していない，とのみ答えるかもしれない。というわけで，社会学者がある一つの自覚文脈を確定するにあたっては，いつでも各々の相互行為者の自覚を別々に確認することが必要とされる。最も確実な方法は，観察なりインタビューなりを通じて，各々の相互行為者から，自分自身の自覚の状態についてデータを得ることである。一方のインフォーマントの言葉のみを鵜呑みにすることは，たとえ開放自覚文脈が成立している〔と思われる〕状況においても危険なことである。

それぞれのタイプの文脈の内部で生じる継続的な相互行為は，その文脈〔自体〕を変容させる傾向にある。ある文脈における変化がどのような方向に向かうのか，あるいは継続的な変容のパターンにはどのようなものがあるのかといったことは，まだ現時点では経験的な問題である。従って，閉鎖自覚文脈は，疑念を喚起することで破壊され得るが，その疑念が払拭されれば，閉鎖自覚文脈が復活することになる。もしその疑念が確信に変わるならば，自覚文脈は相互虚偽か開放かの何れかに変化する可能性がある。〔二人のうち〕一方の相互行為者の相手の目に映った自分自身のアイデンティティが変化すると，開放自覚文脈は閉鎖自覚文脈か相互虚偽自覚文脈の何れかにたやすく変化し得る。例えば，自分の秘書がスパイではないかと疑っている政府高官は，その疑念を直ちに検証しなければならない。もしその高官が，秘書がスパイであることを知りながらそのことを明かさなければ，今度は秘書が相手の目に映った自分自身のアイデンティティを読み誤ることになる。このようにして，今度は閉鎖自覚文脈が成立する。もし秘書が，政府高官の自分に対する新しい見方〔＝その時点での相手の目に映った自分自身のアイデンティティ〕をこっそりと知るが，それでも何も言わないなら，文脈は再び〔逆の意味で〕閉鎖自覚文脈になる。しかし，もしその高官が秘書のスパイ行為を暴いたなら，今度は文脈は開放自覚になる。というのも，今や何れの側も相手の本当のアイデンティティを完全に認めることになるからである。

各々の文脈が変容するまでにどれほどの時間を要するのか。これもまた経験的な問題である。抽象的には，どの文脈も他の文脈と比べ安定性に欠ける，ということはないが，特定の具体的領域においては，安定性の度合いに違いが出てくるかもしれない。終末期患者にとって，疑念自覚文脈はおそらく最も安定性を欠いたものであり，患者の疑念を確信に変えるようなスタッフとの相互行為の継続によって破綻することになる。

自覚文脈を研究するためのパラダイム

様々な自覚文脈において生じる相互行為の研究を組織化するために，我々は一つのパラダイムないし一連の指示を考案した。これらの指示は，発展的な相互行為過程――継続しながら変化する相互行為――の研究に重点を置くものであり，相互行為を強く規定する諸規則に関する相対的に静態的な研究とは区別されるものである(2)。

パラダイムの構成要素は次の通りである。（1）特定のタイプの自覚文脈を記述する。（2）自覚文脈の成立を支える構造的条件(3)を記述する。（3）結果として生じる相互行為を記述する。（4）文脈の変容をもたらす相互行為の変化と，その変容に関わる構造的条件を記述する。（5）自覚文脈の変化を管理しようとする際に用いられる，様々な相互行為者の戦術を記述する。そして最後に，（6）もともとの自覚文脈，その変容，およびそれらに関連する相互行為が，相互行為者と特に影響を受ける組織ないしは機関〔の双方〕にもたらす種々の帰結を記述する。

このパラダイムの使い方を例示するために，〔以下では〕終末期患者を取り巻く閉鎖自覚文脈を手短に説明したい。

（1）入院中の患者は自分の死が迫っていることを知らないことが多いが，スタッフは知っている(4)。従って，スタッフと患者の相互行為は，患者の本当のアイデンティティに関する閉鎖自覚文脈のなかで行われることになる。

（2）少なくとも４つの主要な構造的条件がこの閉鎖自覚文脈を規定している。第一に，患者のほとんどは，差し迫った死の兆候を見分けることについて特に経験があるわけではない。第二に，病院は，偶然にも意図的にも，医学的真実を患者から隠すという点で見事に組織化されている。〔カルテなどの〕記録類は手の届かないところに保管され，スタッフは患者に情報を漏らさない術に長けている。患者の病状に関する会話は，通常，本人から遠く離れた場所でなされる。また，スタッフは医療上の秘密を漏らさないように，患者の近くでは共謀して行動するように訓練されている，またはそうすることに慣れている。第三に，医師たちは専門的な根拠によって〔患者から〕情報を隠すことを是認されている。「患者に死期が迫っていることを告げて，かれらから全ての希望を奪う。どうしてそんなことをしなければならないのか」。そして最後に，通常，スタッフの秘密を探る手助けをしてくれるような味方というものが患者にはいない。すなわち，家族や他の患者でさえ，もしそのような情報〔＝秘密〕を知っていたとしても，それを〔本人に伝えることは〕差し控えるだろう。

（3）患者が真実を理解するのを防ぐために，職員〔＝スタッフ〕は数多くの「何も異常なことはない」という相互行為戦術を活用する。スタッフは，患者の前では，あたかも患者が終末期ではなく，〔治癒可能な〕病気であるに過ぎないかのように振る舞おうとする。まるで患者がこれからも生き続けるかのようにその人に話しかける。スタッフは，患者の今後の将来について語り，そうすることで，自分は治ると患者が思い込むように仕向ける。同じ程度の，あるいはもっと悪い病気から回復した人たちの話（そこにはスタッフ自身の話も含まれる）を患者に聞かせる。このような遠回しな方法で，スタッフは患者に偽りの人生物語を提供する。もちろん，明確な目的を持って嘘をつくことで，患者の人生がこれからも続くことを保証する，という直接的な方法を採用することもある。

上記の戦術を補うために，スタッフはさらに戦術を追加して情報漏洩を防ごうとする。患者が自分の本当の病状に関する会話をふと耳にすることのないように，用心に用心を重ねる。またスタッフは，うっかり秘密〔＝患者の情報〕を漏らすことがないように自分の表情や他の身振りをコントロールすることで，〔自らの〕表出を慎重に管理する(5)。すなわち，患者の死が迫っていることをめぐって経験するどのような悲しみの表出もコントロールしなければならない。ほぼ必然的に〔しかし〕常に意識的にというわけではないが，患者と過ごす時間を短くしたり，患者との会話を制限したりすることで，スタッフは，秘密を漏らす可能性のある手がかりの数を減らそうとする。

（4）このような共謀ゲームでは，チームワークは驚異的なものになり得るが，〔他方で〕患者に秘密が漏洩する危険性は非常に大きくなる。患者がすぐに亡くなるか，永久に昏睡状態になるかでもしない限り，患者は周りの人間が自分をどのように見ているかについて疑念を抱いたり，どう見ているかを明確に理解したりさえする傾向がある。患者は時折，自分に関する会話をふと耳にすることが実際にある。職員〔＝スタッフ〕が無意識のうちに手がかりを与えたり，会話で誤りを犯したりすることがあり，それが患者の疑念をかき立てることになる。日勤のスタッフと夜勤のスタッフが，患者に矛盾する情報を伝えたり，相反する手がかりを与えたりするかもしれない。病院内では，職員が入れ替わり立ち替わりしたり，新しい職員が加わったりすることが多いが，このことが秘密の漏洩の危険性を高めるかもしれない。〔また〕患者自身が，病院で何日か過ごすうちに，あるいは入退院を繰り返すうちに，自分の周りで何が起きているのかについて，より詳しく知るようになるかもしれない。また患者は，その結果として，病院が自分の病状に関する情報を全て提供するように組織化されている，というよりもむしろ〔逆に〕，情報のほとんどを隠すように組織化されている，ということを理解するようになる可能性がある。そのため，患者は言われたことを割り引いて捉えるようになり，その正確さに不信感を抱くようになる。要するに，閉鎖自覚文脈を支えていたもともとの構造的条件が崩れ始めるか，あるいは疑念自覚文脈や開放自覚文脈への移行を促す新たな構造的条件による打撃を受け始めるかするのである。このことは，患者の病状がひどく悪化していないときにも言えることだが，いざ悪化したときには，このことが原因となって，患者が自分の病気についてさらなる問いかけを〔スタッフに〕してくる可能性があり，それに対してスタッフたちは，患者が終末期にあると自分たちが知っていることを悟られないように，機転を利か

せて対処しなければならない。

（5）相互行為者のなかには，患者との関係を他のタイプの自覚文脈に移行させたいと望む者もいるかもしれない。その場合，スタッフは何らかの相互行為戦術を用いることができるが，それはほとんどの場合，情報を隠すという〔上記の〕戦術をそのまま裏返しにしたものである。スタッフは，意図的に秘密にしていた情報の全てあるいは一部を漏らそうとするかもしれない。〔例えば〕表情の不適切な管理によって，慎重で曖昧な言い方によって，希望に満ちた予後について患者を十分に納得させることに単に失敗することで，〔患者の〕将来についての会話を全て今現在に集中したものに置きかえることで，あるいは患者との会話と患者自身の双方をますます避けることによって，そうするかもしれない。もちろん，職員〔＝スタッフ〕が患者に「もう末期なんですよ」と単刀直入にはっきりと告げることもある。

（6）終末期患者を「取り囲む」閉鎖自覚は，患者とスタッフ〔の双方〕に対して多くの重大な帰結をもたらす。他者から見た自分のアイデンティティを知らない患者は，自分が終末期にあることを自覚している，という風に振る舞うことができない。そのため，患者は近親者と自分の行く末について話すことができない。近親者の悲しみを癒やすこともできない。また，予期される死に穏やかに（あるいはパニックやヒステリーを起こして）向き合うことを通じて，自分が終末期にあるという設定で自分自身と対話することもできない。

近親者や病院関係者は，患者の死にかかわる開放自覚に伴う，ある種ストレスの溜まる場面から逃れることができるが，同時に，様々な死への通過儀礼に満足行く形で参加することもできなくなる。妻は公然と夫に別れを告げることができず，スタッフは患者が時に見せる気高い死の受容を分かち合うことができない。閉鎖自覚文脈がスタッフのみならず病院組織に及ぼす深刻な帰結に，次のような興味深い分業体制がある。すなわち，そこにおいて看護師が，死や死ぬことに関する話題を避けなければならないストレスの多い言葉のやりとりの大半を担うことになる，という現象がそれである。他方で医師は，この種のストレスの大半から逃れる〔ことができる〕。というのも，医師は，具合がよさそうな患者に対しては短時間面会するだけでよく，そのため会話も最小限に抑えられるからである。さらに，もし――ある種の特殊な病棟のように――閉鎖自覚文脈が全く存在していなければ，特定の病院業務を取り巻く雰囲気も全く異なったもの（大抵はより重苦しさのないもの）になるだろう(6)。

従来の相互行為分析

自覚文脈という概念は，社会的相互行為に関連する自覚〔という現象〕に対する他の理論的アプローチを理解する上で有用である。種々の自覚文脈の内部で生起する相互行為を研究するための我々のパラダイムは，社会学の文献で取り上げられてきた自覚と社会的相互行為の多様な側面を一つの図式のなかに位置づけるために使うことができる可能性がある。この概念とパラダイムの双方の適用例を例証するために，我々はジョージ・H・ミードとアーヴィング・ゴフマンの理論的研究

とドナルド・ロイとフレッド・デイヴィスの調査研究を検討することにしたい。彼らの仕事そのものを評価するというよりもむしろ，社会的相互行為に関する理論と調査の現状を示す好例として，彼らの著作を取り上げる。

ジョージ・H・ミード

ミードの社会的相互行為に対する関心は，社会秩序とその秩序的変化の問題に対する〔彼の〕生涯にわたる関心に比して二次的なものであった。我々は，彼の相互行為に関する分析を――コミュニケーションと思考に関する彼の論考と同様に――，主として開放自覚文脈に関わるものであると解釈している。よく知られた一節で彼は次のように述べている。「要するに，意識的ないしは有意味な身振り会話は，無意識的ないしは有意味ではない身振り会話に比べて，社会的行為[3]――すでに述べたように，この行為の継続に従事する個々人の一人一人が自分に対する他者たちの態度を取得する，という営みがここに含まれている――内部における相互調整のメカニズムとしては，はるかに適切で効果的なものなのである」(7)。

ミードにとって「自覚」とは，本質的に，その人自身の身振りが（有声身振りであれ何であれ）他者たちによってどのように定義されているのか，その進行中の定義の有り様に関する**正確な**自覚――そしてその自覚に基づいて，その身振りに後続するさらなる行為が展開する――のことであった。換言するならば，「他者が反応するように，〔自分で〕自分自身に対して反応する（中略）このプロセスは，〔内在化された〕他者たちとの自己〔内〕会話に参加し，〔そこにおいて〕自分が何を言っているかを自覚し，その自覚を以って，その後に〔さらに〕何を言うことにするかを決定する営みである。これは我々が皆よく知っているプロセスである」(p. 217)。この洞察力に優れた社会哲学者が読者に提供しているのは，そこにおいて人びとが純粋かつ開放的にコミュニケーションを行っている，そうした普遍的状況に関する，含意が豊かではあるが極度に一般的な〔＝抽象的な〕分析である。

ミードは，共有されたコミュニケーションや――上記の引用が示唆するように――自らの行動を他者たちがどのように知覚しているのかを推測し，その推測に基づいて自らの行動を自分自身でさらに方向づける営みの有り様に対して，常に一貫して関心を寄せていたわけではない。こうした推測に基づいて，その後一方〔の相互行為者〕が他方〔の相互行為者〕を欺く〔という選択を行う〕ことになるのか，それとも素直に相互行為というゲーム[4]を行うことになるのかについては，〔ミー

---

[3] シンボリック相互作用論（ブルーマー）における「ジョイント・アクション」(joint action）に相当する（https://archive.md/TnMka#selection-593.2-593.624)。

[4] Game には，「遊び」，「ゲーム（競技)」，「駆け引き」など，様々な訳語がある。周知のようにミードは，人間の相互行為の原型を「ごっこ遊び」や「野球のゲーム」になぞらえていた。囚人のジレンマなどのゲーム理論では，相互行為は基本的に「(利益をめぐる）駆け引き」として捉えられている。こうしたことを考慮するならば，「相互行為というゲーム」という，相互行為とゲームを等号で結ぶ訳語も許されよう。この点については次の文献が示唆的である。Goffman, E., 1969, *Strategic Interaction*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

ドの議論においては〕曖昧なままである。おそらくミードは，後続する相互行為が純粋に開放的で協力的なものであることを言おうとしているのだろう(8)。彼の研究のこの側面に関する我々の論評の妥当性が遺憾なく示されているのは，ミードがシンボル化の共有を伴わない相互行為の側面を取り上げ，それを〔彼の探究対象から〕排除しようとしている〔ミードには〕珍しい一節である。彼は以下のように述べている。

当然ながら，他者たちとの会話のなかには，他者たちに喚起されるのと同じ反応を自らの内に喚起しないものが多々ある。このことは特に感情的な態度に当てはまる。人が誰かをいじめようとする時，その人が自分をいじめようとしている〔状態にある〕，ということはない。（中略）私たちは時に，自分の態度がどのような効果をもたらすかを正確に見積もって演技することが確かにあるし，ある結果をもたらすために意図的にある口調で話すことがある。そのような口調は，自分自身のなかに，他の誰かに喚起させたいと考える反応と同じ反応を喚起する。とはいえ，〔単なる〕会話において進行中の事柄の大部分は，このような（中略）状態にはない。

自分のなかで現在進行中の事柄を〔未来において〕他者たちに喚起するような，そうした表現〔方法〕を探求することは，俳優の仕事であるのみならず芸術家の仕事でもある（中略）その刺激は他方〔＝鑑賞者〕に〔如上の反応を〕呼び起こすが，これは言語の本来の機能とは別のものである（略）（pp. 224–226）。

では，言語の本来の機能とは何なのか。「コミュニケーションに本質的なことは，〔そこで用いられている〕シンボルが，他の個体に喚起するものを自己の内に喚起しなければならない，ということである」。上記の引用においてミードは，開放自覚〔文脈〕や純粋なコミュニケーションとは異なるものに基づく相互行為に言及しているようである。例えば，意図的ないじめでは，その動作が相手を怖がらせることはあっても，行っている当人を怖がらせることはない。詩を書くことで，人は自らの内に見出すものを他者たちに喚起する手段を見つけ出す（ちなみに，ワーズワースはそうした自らの〔内的〕直接的反応を詩化するために数年を要した，とミードは述べている）。また，この同じ箇所でミードは，「怒っている人が，他の誰かの内に呼び起こしている恐怖心を，自らの内に〔も〕呼び起こしている，と我々が仮定することはない」と指摘している。すなわち，この自然発生的な感情の表出において，演技者と観客は同一の反応をしているわけではないのである。この一節に挟まれたミードの簡潔な説明に，次のような内容が記されていることは何ら驚くにあたらない。人びとは俳優が行うのと全く同じように演技をすることができるが，「それは普通の状況ではない。人は常に俳優であるわけではない」，と。確かにその通りである。しかし，我々がまさに演技を行っているとき，我々はどのような状況に置かれているのであろうか[5]。

[5] その状況を考察しているのが，次項のゴフマンに関する彼らの考察である。

ミードの分析はとりわけ本論と密接な関わりを持っている。というのも，彼の分析は他の学者たちの仕事においては往々にして欠落している相互行為の特性，すなわち相互行為の発展的特性を強調しているからである。ミードの論考において有意味シンボルという概念は，社会秩序の合意的性格を強調するものであるのみならず，社会秩序がどのように変化して行くのか，すなわち，行為の構築の過程において社会的対象がどのように形成・再形成されて行くのかを示すものともなっている。現在のミード解釈においては，〔相互行為の〕この発展的な側面が見落とされがちである。同じことは，彼による自己の捉え方，すなわち，実体的というよりも過程的な自己把握についても言えることである。過程としての自己は，相互行為が通常，静態的なものでも，単に反復的なものでもないことを保証するものである。ミードの世界においては，行為とは終わりなく展開するものであり，しばしば行為者自身をも驚かすものである。またミードは，その秀逸な論考のいくつかにおいて，過去の出来事でさえ再構築されること，それが如何に行われるのかということ，そしてその再構築が現在の出来事の行く末にきわめて大きな影響を与えること，〔この三点〕を強調している。要するに，相互行為は常に何らかの方向へ向かう傾向にあるが，その正確な方向を，相互行為者たちがいつでも確実に知っているとは限らない，ということである。

アーヴィング・ゴフマン

アーヴィング・ゴフマンの研究は，相互行為に関する現在の理論的分析のなかで，おそらくは最も影響力のあるものである。ミードの対極にあるわけではないが，そのスタイル，気質，理論的パースペクティブ，そしてなによりも人びとの相互作用〔それ自体〕に焦点を当てていること，〔この４点〕において，ゴフマンがミードから大きくかけ離れたところに位置していることは間違いない。彼の処女作である『日常生活における自己呈示』(9)を紐解けば，ゴフマンの詳細かつ卓越した相互行為分析を一望することができる。

〔本書の〕冒頭でゴフマンは，観客が個人のアイデンティティを定義する必要性を強調している。「ある個人が複数の人びとの居合わすところへ登場すると，通常その人びとはその個人について情報を得ようとするか，あるいはその個人についてその人びとがすでに所有している情報を活用しようとする」(p. 1=1[6])。行為者が望むと望まざるとにかかわらず，その人の行為はその人自身の印象を観客に与えることになる。従って，人びとは，悪知恵や計略が全くない状態で行為を行っているというよりも，「望ましい印象を作り出すことに努力を注いでいる」場合がほとんどなのである。「印象を得心いくものに仕立上げる」(p. 162=296）ことは避けて通ることのできない現実なのである。それは，双方の相互行為者にとって「他者たちの行為をコントロールする」(p. 2=4）一つの方法なのである。

こうした印象管理のために，「相互行為をしているうちに行為者が投企した自分像に矛盾したり，それへの不信を募らせたり，あるいはそれに疑問を投げかけたりするような出来事が生じる可能性

[6] 以下，本項においては石黒訳（1974）の該当ページを記す。

がある」〔(p. 6=14)〕。本書の大部分は，このような形で相互行為が乱れたときに生じる困惑や当惑を主題にしている。ゴフマンは，混乱の結果生じる「予防措置」を詳細に分析している。〔それは〕「行為者自身による防衛〔的措置〕と，他の者によって投企された状況の定義を懸命に守ろうとして観客が行う保護〔的措置〕」〔の二つから構成される〕(p. 7=16)。

上記の全てにおいて，ゴフマンは閉鎖自覚に焦点を当てている。彼は「チーム単位の共謀」(pp. 112–120=207–223) と「表出的コントロールの維持」(pp. 33–37=58–66) のそれぞれに一節を割いている。さらにゴフマンは，相互虚偽自覚文脈を明示的に扱っている。例えば〔次のような一節が挙げられる。すなわち〕，「各チームは自チームおよび他チームに関する率直な見解を抑圧し，自己ならびに他者に関して相手にも比較的受容されやすい像を投企する傾向がある。そしてそれ以降のコミュニケーションが確実に確固とした狭い回路に従うようにするために，相手チームが抱かせようと努力している印象を〔かれらが〕維持できるように暗黙の了解で機転を利かせて支援する構えが双方のチームにはできている」(p. 107=196) (10)。概してゴフマンは，少なくとも本書においては，開放自覚文脈に対しては無関心である。行為者が投企した定義に対して観客が疑念を抱く文脈に触れてはいるものの，その疑念が徐々に高まり，そして検証される仕組みに踏み込むことはない。

しかし，議論されているのが相互虚偽自覚であれ閉鎖自覚であれ，ゴフマンの主たる関心は，相互行為がどのように継続して行くのか，あるいは，もしそこに乱れが生じた場合，相互行為者たちがどのようにしてその回復を成し遂げるのか，に向けられている。ゴフマンは，相互行為者たちによる意図的な操作を通じて，あるいは相互行為それ自体の持続的な経過を通じて変容する自覚文脈には，ほとんど関心がない。実際，彼の分析は，持続的な相互作用よりも，一時的ないしは反復的な相互行為に向けられている。発展的ではないものに焦点を定める如上の姿勢と歩調を合わせるように，ゴフマンのドラマツルギー・モデルが言及対象とするのは，筋書きや発達の只中にある相対的に予測不可能で継起的なトランスアクションを伴う**ドラマ**それ自体ではなく，受容可能な幻想を創り出すために来る日も来る日も夜通し努力する舞台俳優たちの**チーム**の方である(11)。特に強調しておくべきことは，ゴフマンにおける行為者ないしは俳優のアイデンティティが行為者自身にとって問題的なものになることは稀であること，そしてそれが問題的なものになるのは，いつでも観客に対してのみであること，〔この二点〕である(12)。

本書では，ゴフマンは，より大きな社会的単位によって課される構造的条件を潜在的にしか扱わない傾向がある。むしろ，彼が主として焦点を定めているのは，舞台装置や表局域・裏局域などの状況的条件である。しかし，『〔日常生活における〕自己呈示』における相互行為のほとんどは，サービス提供者と顧客や局内者と局外者，すなわち，相対的に互いに相手を知らないか，あるいは私生活の重要な側面を各々お互いに隠し合っている人びとがいる施設で生じているものである。ゴフマンは，どのような構造的条件が，上記のものとは全く異なる相互行為につながる可能性があるのか，それを考察する作業を読者に委ねてしまっている。例えば，もしゴフマンが，参与者たちが相対的に互いに相手をよく知っているような場所，つまり，近隣地区や小さな町，あるいは家族などを研究対象にしていたならば，彼の印象管理に関する議論は全く異なったものになっていたかもしれな

い。同様に，ゴフマンは相互行為がもたらす様々な帰結（とりわけより大きな社会的単位に対するそれ）を体系的に探求することにはあまり関心がない。しかし確かに一方で，相互行為者たちにとっての帰結については，出会いの混乱，あるいはその円滑な継続との関連という特定の観点から言及がなされてはいるが。

自覚文脈の範囲が限定されているということはさておき，ゴフマンの相互行為観は非発展的でしかもかなり静態的である。他の著作においては，ゴフマンは，かなり持続的な相互行為にも関心を寄せているが，その関心が相互行為を強く規定する種々の規則に向けられているのが特徴的である。多くの場合，〔ゴフマンにおける〕相互行為は，まるでギリシャ悲劇のように容赦なく終結へと向かって行く(13)。しかしながら，こうした点で彼の分析は，先達の分析よりもはるかに先を行っている。

次に我々は，二つの有用な論文を検討する。その目的は，第一に，報告された研究を我々の自覚〔文脈の〕パラダイムのなかに位置づけること，第二に，相互行為分析へのそれらの貢献度を評価すること，そして第三に，もし今そのような研究を行うとしたら，その分析に何を付け加えることができるかを提案すること，この三点にある。

ドナルド・ロイ

「効率と『調整』――出来高払いの機械工場における非公式の集団間関係――」(14)という論文において，ロイは，「産業組織内の二つの集団間の相互行為は，相互に影響を及ぼし合っている包括的な集団間ネットワークのなかで生じ，それに条件づけられている，ということ」を実証することに関心を寄せている。この相互行為は，経営陣と労働者の間の競合という形を取る。労働者たちは，巧みに画策し，示し合わせて，経営陣が定めた生産ノルマを達成するための方法を編み出す。一方経営陣は，そうした「『上手く立ち回る』ための裏技」の成功を最小限にとどめようと試みる。〔労働者たちの〕こうした技は，「経営陣からの課題設定に対する反応であるのみならず，循環的な相互作用において」，経営陣が配備した作業時間係による「作業時間の管理に対するより効果的な対抗術の開発を促す刺激でもあった」のである。ロイの議論において重要な箇所の一つに，この経営陣との果てしない競合において，互いに持ち場[7]を異にする労働者たちが同盟関係を成立させる「集団間共謀」を扱っているものがある。

では，ロイの研究を，我々の自覚文脈パラダイムのどこに位置づけるべきであろうか。ロイの説明における自覚文脈は至極明瞭というわけではない。というのも，労働者の間で起こっていることを経営陣がどの程度把握しているのか，それをロイの説明から読み取ることができるとは必ずしも言えないからである。しかし概ね次のように捉えることができそうである。すなわち，特定の共謀ゲームを閉鎖自覚〔文脈〕にとどめておこうとする労働者の試みと，そうしたゲームを経営陣が周

[7] 具体的には，作業時間係（time checkers），品質管理係（inspectors），道具置き場係（tool-crib men），倉庫係（stock men），機械整備係（set-up men）などの「係」を意味する。

期的に察知する，という現象が交互に繰り返されていた，と。経営陣が周期的に〔労働者たちによる共謀ゲームを〕察知する，というこの現象が，上記の閉鎖文脈を一時的に相互虚偽自覚〔文脈〕と開放自覚〔文脈〕の何れかに変容させたのかどうかを〔ロイの説明から〕判断するのは難しい。しかしながら，閉鎖自覚文脈が成立し，それが周期的かつ一時的に相互虚偽あるいは開放〔自覚文脈〕に変容し，〔しかる後に〕労働者たちによるさらなる共謀ゲームによって閉鎖〔自覚〕文脈が復活する，という一連の現象全てを可能にする構造的条件を，ロイが明確に提示していることも確かである。

ロイは，閉鎖自覚〔文脈〕を維持し，変容させ，そして復活させる過程で，〔労働者側と経営陣側という〕双方のプレーヤーが用いる相互行為戦術を非常に詳細に説明している。特に労働者側のチームワークについては見事な描写を行っている。しかし一方で，経営陣の戦術は，主として「下」から〔すなわち労働者側の視点から〕描写されている。その理由は二つある。第一に，ロイは工場労働者としてフィールドワークを行っていた。そのため，経営陣に固有のパースペクティブや意思決定という〔「上」の〕内部事情に通じることはほとんどできなかった。第二に，彼は〔そもそも〕経営陣の視点を詳細に調べる必要がなかった。というのも，ロイの調査は，労働者たちが如何に労働活動を組織化するかを探究する目的で設計されていたからである。

ロイは，〔労働者たちと経営陣の〕競合が，ひいては自覚文脈が，振り子のように揺れ動くその諸位相について説明している。であるにもかかわらず，そこでは本当の意味での時間的展開が欠落している。というのも，彼は相互行為というものを，無限に同じ〔周期を辿る〕ものとして捉えているからである。おそらく，〔研究対象となっている〕相互行為の始点と終点は，調査それ自体に費やされた期間によって定められたものと思われる。ちなみに，ロイ自身は何気なく次のように記している。「一連の［新しい規則］[8] がいつ始まったのか，筆者が〔このフィールドに〕参入した時点からどれほど遡ったところにその始まりがあるのかはわからない。古参の工員たちは『ブース・システム』[9]による生産管理システムが導入される以前に彼らが謳歌していた『黄金時代』について語ってくれた」。相互行為に対する関心から次のような問いが提起されるはずである。すなわち，どのような状況から相互行為の諸位相が生まれ展開したのか，それはどこで終わったのか，もし誰かが上記のような共謀的な相互行為を明るみに出そう[10]と試みていたら，どのような事態が起き得ていたか。

相互行為の帰結〔ないしは影響〕については，主として業務の停滞や非効率の累積という観点からの言及が散見されるが，やはり，特に組織全体の機能に対する様々な影響についてさらに詳しく知りたいところである。

---

[8] Glaser and Strauss による補足。
[9] 作業場をブース毎に分けて監視（monitor）する生産管理システムのこと。
[10] 開放自覚文脈のもとに置くこと。

フレッド・デイヴィス

これまでの議論とは非常に異なった相互行為把握を提示するのが，フレッド・デイヴィスによる「逸脱の拒否[11]――可視的な障害を持つ人びとによる緊張を伴う相互行為の管理について――」[12](15)である。この論文の副題がその内容の全てを正確に説明している。障害者の可視的な[13]スティグマは，社交に対する脅威となり，それは，「第一に，相互行為における排他的な焦点となる傾向があること，第二に，〔社交的情動の〕表出の許容範囲を脅かす可能性を潜在的に持っていること，第三に，障害者の他の属性との不協和をもたらすこと，そして最後に，共同活動が可能かどうかの見極めを曖昧にする[14]要因になること，以上の少なくとも４点から説明することができる」。これらは，「特定の状況に応じて，単独であるいは組み合わさって，そこにおいて社交が展開する規範的ルールや諸前提という枠組みに対して，緊張をもたらすよう作用する文脈的な創発特性」である。

相互行為への深刻な脅威となるこうした多様な創発特性に関する議論に続いて，「社会生活に熟達した障害者が，そうした脅威をぎりぎりで食い止め，あるいは消し去り，〔少なくとも〕それが相互行為へ及ぼす衝撃を和らげるために，その脅威に対して如何に対処するのか」が示される。その分析は，「トランスアクション〔やりとり〕の観点から，健常者との社会関係が辿ることになる典型的な諸段階」の輪郭を描くことを目的としている。その段階は次のように推移する。すなわち，（１）虚構としての受容，（２）「突破」あるいは健常者同士のような[15]役割取得の促進，（３）健常者同士のような関係[16]の制度としての確立，の三つがそれである。障害者の観点から見ると，こうした諸段階が「繰り広げられて行くこと」こそ，逸脱の拒否ということになる。逆に健常者の観点から見ると，健常化となる。その過程の各段階に関して，いくつかの相互行為戦術が指摘されている。ただしデイヴィス自身は，「可視的な障害を持つ人びとが社会的状況において駆使する途方も

---

[11] 逸脱者とラベリングされた人びとがこの性格づけを受け入れることを拒否すること。

[12] 障害があることを「逸脱」とみなすことは，ゴフマンの『スティグマ』（1970，石黒　毅訳『スティグマの社会学』せりか書房）と同様，相互行為秩序を乱すものをすべて「逸脱」と呼び，互いにかけ離れた社会現象を同じ枠組みで考え，意外な共通点を見いだして洞察を得るための，社会学者が用いる技法の一つである。もちろん，その際，「障害」を「犯罪」のような悪事同様に考えて非難しようとする意図は，比較研究を行う社会学者には全くない。

[13] ここで「可視的な」とは，「どうしても目（または耳，または鼻）に入ってしまう傾向がある」という特性を意味する。次を参照のこと。中河伸俊，2006年『スティグマの相互行為的マネージメントと文化的構成の研究』平成16年度～17年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，11頁。

[14] 障害者たちと健常者たちが「いっしょに何ができるのかを判断しにくくする」（中河 2006: 11）。

[15] 原語は「normalized」。現在，日本でも広く使われる「normalization」にかかわる言葉とは異なり，ゴフマンの『スティグマ』においてと同様，障害者を相互行為秩序を乱すものと捉えた健常者が，障害者の多様な障害を無視して，健常者のように扱うことをこの論文では意味している。デイヴィスの論文から60年も後の現在では，「ノーマライゼーション」は，障害者も健常者のように社会で自由に行動できるように，設備や受け容れ方を障害者に適した形に変えて行くことを意味するようになった（例えば足の不自由な人が車椅子で行き来できるように段差をなくしてスロープやエレベーターを設置することなど）。

[16] 原語は「normalized relationship」。この言葉には，障害者や病人を施設に入所させることのような意味もあるが，ここでは，健常者同士の関係を標準的なものとして，それを健常者と障害者の間でも行うことを意味している。

なく多様で特有なアプローチ，策略，戦略」よりも，相互行為の諸段階の方に関心を寄せているのではあるが。

この調査研究では，相互虚偽自覚（「虚構としての受容」）から開放自覚（「健常者同士のような関係の制度としての確立」）への変容が扱われている。そうした変容の操作は，主として障害者によってコントロールされているものの，障害者のみがその担い手となっているわけではない。デイヴィスの記述によれば，障害者はまず相互行為を虚構モードに保とうとする（双方の相互行為者が，互いに障害者のスティグマに気づいているものの，どちらもそれが存在しないかのように振る舞う）。続いて障害者〔の方〕が，徐々に，事態を最終局面へと導くよう巧みに操作を行う。そこにおいては，「ある種の許容能力，限界，そしてニーズが〔障害者に〕随伴することを認めることが，適切かつ安全であること」が公然のものと[17]なっている。すなわち，そこでは両当事者が，障害者のスティグマに公然と[18]言及してもよいのである。

開放自覚（健常化）の局面を維持することが，どちらの当事者にとっても如何に困難なことであるかについて，デイヴィスは非常に明確な指摘をいくつか行っている。このことが，彼の議論をさらに豊かなものにしている。例えば，「『健常性』を求める大きな異議申し立てと，まさにその申し立てを自ら棄却する無数の小さな表示とを効果的に組み合わせることは，慎重な注意を要する離れ業であると同時に，本人の相反する姿を見せるという点で，状況的にも心理的にも，両者の関係を多くの危険にさらすものでもある（略）」。この両者の関係には続きがあることが暗に示されている。すなわち，この関係を維持することは困難であるため，両者のこの関係が静止状態を保ち続けることは不可能なのである。ここで我々は「暗に」という言葉を使った。というのも，デイヴィス自身は，健常者同士の社交のようなものが生じ得る局面（段階）まで議論を展開することで満足しているからである。言い方を変えるならば，彼が実際に分析しているのは，参与者たちの意図的な画策を超えて発展する相互行為状況なのである。「逸脱者であることを強いられた人と無力ながらその人を健常者と見なそうとする人，という単純化されたモデルに対抗して我々が提示しようとするのは，亀裂を修復するために両者が矯正的な相互行為を行おうと尽力するようになる可能性がある，と仮定するモデルである」。まさに**両者が**そのような矯正の努力をする可能性があるからこそ，上記の関係は発展的なものとなるのである。我々のパラダイムは，次のような問いを提起する際，役に立つ。すなわち，その関係はどこへ向かうのか，さらにどのような条件の下で，どのような変容を遂げる可能性があるのか。

また我々のパラダイムが示唆するところでは，相互作用が一方の側によって相対的に巧みにコントロールされているときでさえ，〔研究者は〕双方の側に焦点を当てなければならない。というのも，両者の関係の発展的な側面を理解するためには，必然的に双方の行為と自覚に関する知識を必要とするからである。すなわち，次のようなことに関する知識である。さまざまな相互行為の局面

[17] すなわち，オープンに（「開放的に」）（openly）なっている。
[18] すなわち，「開放的に」。

において，健常な相互行為者は障害者とかれらとの相互行為をどのように捉えているのか。それについてその人が何をしており，何をしようと決心するのか。その人の戦術はどのようなものであるのか。それはその場限りのものなのか，あるいは継続性があるものなのか。またデイヴィスは次のようにも想定している。すなわち，障害者は頻繁にこの種の相互行為に参与した経験を持っているが――そのため，そうした相互行為に対処する戦術も進化させているが――，他方で健常者の方は初心者ということになる。確かにそうかもしれないが，実生活では双方の側がともに同様の経験を持っている可能性もある。

最後に，デイヴィスは，障害者が緊張を伴う相互行為を管理することを可能にする一組の構造的条件を特定しようとしている。彼は論文の冒頭で，「日常的な交流の一類型」に言及している。その特徴は，対面的で，長すぎず，かといって短すぎず，ある一定の親密さを伴い，「〔参与者たち〕全員が何が起きるかを概ね知っている程度には儀式化されているが，自発性やわずかに新奇な展開が〔そこでの〕事態にもたらされることを阻むことがない程度の儀式化にとどまっている」ことである。ここではっきりと細部に至るまで描写されているのは，身体的スティグマが現前する状況における相互行為分析の本質を構成するものであって，その単なる背景ではない。〔とはいえ〕相互行為の諸帰結（例えば，両者の満足度や継続的な関係の可能性）については，概して潜在的にしか扱われていない。

パラダイムの一般的含意

この４人の学者たち〔の著述〕を検討した結果わかったことは，相互行為の問題に関する調査研究や理論は，今後，従来よりもはるかに広い範囲の現象を射程に収めなければならない，ということである。もちろん，研究者は，このパラダイムが要求することを全て行う必要はない。とはいえ，このパラダイムは，研究者が自らのデータの限界を探究し，おそらくはそれを押し広げ，加えて，何が行われて，何が行われなかったのかを明確に述べ，場合によっては何故そうなったのか，あるいは何故そうならなかったのかを付記するための指針となる。このパラダイムは，明示的には扱わ**ない**と理論家が決断したことに対する内省を促す。そうすることで，その理論家がより明確で統合度が高くより深い分析を達成する手助けとなる。このパラダイムはまた，相互行為の研究に対する従来の要因アプローチが概して取り扱うことのない，発展と構造に関する問いを提起する(16)。次のような問いがそれである。あるタイプの文脈がどのようにして別のタイプの文脈へと移行するのか。文脈の存立やその変化を促進したり阻害したりする，関連制度の（ルールなどの）構造的条件とは何か。自覚文脈の変化が参与者のアイデンティティに及ぼす影響とはどのようなものか。一方の側が自覚文脈の変化を望み，その一方で他方の側が〔既存の〕自覚文脈を維持したい，あるいは〔変化した〕自覚文脈を〔変化する前の〕元の状態に戻したいと考えるのは何故なのか。〔既存の自覚文脈を〕維持したり，変化〔した自覚文脈〕を元に戻したりする際に使われる種々の相互行為戦術にはどのようなものがあるのか。また，〔上記のことが〕制度的条件の維持に与える影響とは，

そして双方の側〔の参与者たち〕に与える影響とはどのようなものなのか。

このような発展的視点を持つことで，要因アプローチとは対照的に，静態的な特性を分析から除外し，境界を狭めることなく分析を行うことができる。要因アプローチは，次の場合にのみ有用なものとなる。すなわち，分析者が，より大きく発展的で具体的な分析図式のなかで，自らの概念的な境界の位置づけを意識し，そうすることで，他のすべての具体的な要因を暗に射程外のものとするのではなく，読者にその妥当性を説明できる，そうした場合にのみ有用なものとなる。〔逆に言えば〕そうでない限り，現在の理論と知識に照らして〔目下自らが〕検討中の領域に関連する，と他の社会学者たちが捉えている事柄を〔自らの境界＝その領域から〕除外することは賢明なやり方ではない。

構造的条件に焦点を当てることで，相互行為の微視的分析が，そうした相互行為がそのなかで生じているより大きな社会構造の特質を考慮する可能性が高まる。社会学における従来の構造的アプローチは，相互行為の微視的分析を軽視する傾向があると同時に，相互行為の発展的性格に注意を向けることを妨げるところがあった。我々のパラダイムは，社会構造と社会的相互行為という，双子のような存在でありながら，社会学においてはしばしば切り離されて扱われてきた関心事を，一つの発展的な図式に組み込むものである。一方に焦点を当てるために，他方を軽視したり，置き去りにしたりする必要はない。

本論においてはこれまで，想定可能な４つのタイプの自覚文脈しか取り上げてこなかった。すなわち，「開放」，「閉鎖」，「相互虚偽」，「疑念」がそれである。我々は，文献研究やアイデンティティと相互行為の自覚に関する我々のデータの探究から４つの変数を見出したが，上記の４つのタイプ〔の自覚文脈〕は，それらの変数の組み合わせのうち，具体的な妥当性を持つものから生み出されたものである。我々はこれまで，二分法の二つの変数――**二人の相互行為者，自覚の承認**（虚偽を行うか否か）――と，三分法の二つの変数――**自覚の程度**（自覚している，疑念を抱いている，自覚していない）と**アイデンティティ**（相手のアイデンティティ，自分自身のアイデンティティ，相手の目に映った自分自身のアイデンティティ）――について考察してきた。これらの変数を組み合わせると論理上36種類のタイプが考えられるが，その多くないしはほとんどが経験的に存在しないタイプであることを考慮すると，すべての変数の論理的な組み合わせから調査研究を始めることは，不必要なまでに複雑な作業を行うことになるだろう。そこで我々は，相互行為に関連した自覚文脈のタイプを作り出すために，次の〔三つの〕手順を踏むことにした。第一に，妥当なタイプを求めてデータを検討し，第二に，そこに含まれる変数を論理的に引き出し，そして第三に，それらの変数に基づいて，データを取り扱うに際して有用ないしは必要でしかも想定可能なタイプがまだほかにあるかどうかを判断する。

社会学的な文献を精査し，収集したデータを綿密に検討し，そして自身の〔日々の〕生活を注意深く観察すれば，恐らくは，経験的により妥当なタイプを見つけることができるだろう(17)。ますます複雑化する種々の自覚文脈のタイプとそれらに固有の諸帰結を体系的に探究しなければならない。これが本論における分析が持つもう一つの示唆である。全ての論理的な組み合わせ一式から研

究を始めると，その組み合わせの一つ一つについて，経験的な妥当性の有無の観点からふるい分けを行わなければならない。〔自覚文脈の〕タイプは進化させなければならない。そうしたやり方[19]で諸タイプを捕捉するためには，我々が提示した〔上記の〕手順を用いることを強く薦める。

本論の冒頭において我々は，自覚文脈をさらに複雑にする二つの要因として，〔相互行為に〕参与する人びとが三人以上になることと，ある種の自覚文脈に利害関係を持つ組織的なシステムを代表する人びと〔の相互行為への登場〕を挙げた。〔さらに〕ある種の社会現象は，我々の自覚文脈に関する知見を広げる上で戦略的な位置づけをかなりの確率で有するものとなる。例えば，科学や産業における研究成果，スパイ・システム，その行為を「スクウェアたち」[20]が普段から目にしている可能性のある逸脱者のコミュニティ，外交交渉において生じるような種々の観客の面前で行われるタイプの交渉，そして，メルヴィル・ダルトンやアルヴィン・グールドナーが描いているような非公式の報酬システム[21]などが挙げられよう(18)。

原注

(0) 本論[22]に登場する事例の多くは，アメリカ国立衛生研究所の研究助成（GN 9077）を受けて行われた，病院職員[23]・看護・終末期患者に関する筆者たちの研究成果から取り集めたものである。

---

[19] 恐らくは「感受概念（法）」（sensitizing concept）の使用を意味している。感受概念とは，調査研究に先立って概念規定を精密に定めておくのではなく，比較的規定の緩やかな概念を使って調査研究を開始し，その調査研究の過程のなかで，徐々にその規定を練り上げて行く，という概念の使用方法を指す言葉である。ブルーマーの言葉を借りるならば，「〔内容が厳密に定められた〕概念がもつ抽象的な枠組みのなかに事例を埋め込むのではなく，〔その内容が大まかな〕概念から出発して，事例の持つ個々の独自な有り様へと至らなければならない」（後藤訳 1991: 194）とする概念の用い方を意味する。「定義的概念（法）」（definitive concept）や操作概念法に対置される概念使用方法である。

[20] 村上訳（1978: 115–150）を参照のこと。

[21] このシステムに関するダルトンによる描写の概略については，村上訳（1978: 183–186）を参照のこと。

[22]「本論」に対しては，少なくとも以下の二つの観点からの学史的位置づけが可能である。

第一に，本論は，シンボリック相互作用論に特有の社会的相互行為把握の一つを提示する文献である。本論に示される相互行為把握は，以下にも記されているように，その後，*Awareness of Dying*（1965）において終末期現場に適用され，一つの経験的研究として結実する。さらにそれ以降，一方でシェフ（Scheff, T. J.）によって合意研究の重要素材として活用されるとともに（https://archive.ph/DzbHX#selection-1003.3-1003.581），他方では（あまり知られていないが）「考慮の考慮」（https://archive.md/HmvW3）という社会（心理）現象を明示的に示した重要論考の一つとして，社会システム論者のN・ルーマンの理論化において依拠されることになる（https://archive.md/DzbHX#selection-881.4-881.500）。以上のことは，我々が「本論」を「シンボリック相互作用論基本文献翻訳シリーズ　No. 3」として公刊する最大の理由でもある。

第二に，本論は，グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）の萌芽文献として位置づけることも可能である（この意義については，本稿末尾の「訳者あとがき」を参照のこと）。周知のように「本論」の三年後，二人は *The Discovery of Grounded Theory* を世に問う。とはいえ，まさにこの共著以降，二人はGTAとの関わりにおいて別々の道を歩むことになる。その後，日本の社会学界におけるGTAは大別して三つの流れに分かれることになる。グレイザー流，ストラウス（＆コービン）流，M-GTA（木下康仁）がそれである。

[23] Hospital personnel. ここでは「病院職員」と訳したが，以後の使われ方を見る限り，医療スタッフのことを指している。医療スタッフ以外の（例えば）「医療事務」に従事する事務員などは含まれていない。

病院の終末期状況における社会的相互行為と関連した自覚文脈に関する本格的な議論については，近々公刊される我々の著作である *Awareness of Dying: A Study of Social Interaction*（=1988, 木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護：死の認識と終末期ケア』医学書院.）を参照されたい。この研究プロジェクトのチームメンバーの一人であるジャンヌ・クイントは，我々との緊密な連携のもとに上記の研究資料に取り組んでくれた。ハワード・S・ベッカー，フレッド・デイヴィス，アーヴィング・ゴフマン，シェルドン・メッシンジャー，そしてメルヴィン・サブシン〔の５氏〕からは，本論に対して有益なコメントを頂いた。記して感謝したい。

（１）自覚文脈という概念は，〔それ自体が〕一つの構造的単位〔を指すもの〕であり，よくある構造的単位――例えば，集団，組織，コミュニティ，役割，地位など――の一特性を指すものではない。「文脈」という言葉で我々が意味しているのは次のことである。すなわち，「文脈」とは一つの構造的単位であり，その内実は，我々が焦点を当てているもう一つの単位――すなわち相互行為――を内包する，より大きな秩序である，と。従って自覚文脈は，相互行為を取り囲みそれに影響を与える。終末期患者とスタッフとの相互行為が癌病棟や退役軍人病院という文脈の中で生じる。これと同じことを，そうした相互行為はあるタイプの自覚文脈の中で生じる，と表現することもできる。ここで留意すべきは，病棟や病院というものが具体的で制度的な[24]社会的単位であるのに対して，自覚文脈とは，多くの様々な制度的単位のなかで生じる相互行為の類似性を説明するために作られた，分析的な社会的単位である，という点である。

自覚文脈のより一般的な定義は次の通りである。すなわち，自覚文脈とは，どのような特定の人びと，集団，組織，コミュニティ，国家などが，ある特定の問題について何を知っているのか，その組み合わせの総体のことである。従って，この構造的概念は，自覚〔という現象〕を伴う問題であれば，事実上，あらゆる構造的レベルの分析におけるあらゆる問題の研究に適用可能である。

（２）Cf. Erving Goffman, *Behavior in Public Places*, New York: Free Press of Glencoe, 1963.（=1980, 丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造』誠信書房.）

（３）「構造的条件」という用語を用いることで我々は，条件というものが社会構造的単位の一特性として捉えられている，ということを強調している。この単位は，最小のもの（役割，地位，関係など）から最大のもの（組織，コミュニティ，国家，社会など）まで多岐にわたり，ここで議論されている単位より大きい場合もあれば小さい場合もある。通常は，文脈として機能するより大きな単位である。構造的条件は，当該単位を規定する，あるいは方向づける効果を持つ傾向がある。ほとんどの社会学者は構造的条件を道具として仕事で常用している。そのため，この脚注はかれらに向けられたものではない。とはいえ，通常は，相互行為が生起する構造的条件〔という着想〕が，社会心理学者たち，特に心理学科で教育を受けた研究者たちの論考に含まれることは〔まず〕ない。

---

[24] Conventional.

（4）ここでは，スタッフ全員が同じ自覚を持っており，患者のアイデンティティ（＝終末期）に関するスタッフの定義が正しい，ということを前提とする。

（5）Erving Goffman, *The Presentation of Self in Everyday Life,* Edinburgh, Scotland: University of Edinburgh, 1956.　アンカー版（=1974, 石黒　毅訳『行為と演技』誠信書房.）も参照のこと。

（6）Cf. Renée Fox, *Experiment Perilous,* Glencoe, Ill.: The Free Press, 1959.

（7）Anselm Strauss (ed.), *The Social Psychology of George Herbert Mead*, Chicago: University of Chicago Press, 1956, p. 173.　以下，引用は全て本書による。

（8）ハーバート・ブルーマーもまた，ミードのアプローチの優れた価値を指摘するなかで，すでに構造化されているものであれ，展開の途上にあるものであれ，協調的な行為を強調している。次を参照のこと。Herbert Blumer, "Society as Symbolic Interaction" in Arnold Rose (ed.), *Human Behavior and Social Processes,* Boston: Houghton Mifflin, 1962.（=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論』勁草書房，101–115.）とりわけ pp. 187–188（=1991: 111）を参照されたい。

（9）以下，引用は全てエディンバラ版（原版）〔=Goffman(1956)〕から行っている。

（10）この箇所は，終末期患者とその担当看護師の双方が，患者の差し迫った死に関する話題を慎重に避けながら，相互虚偽に従事している状況をうまく描写している。

（11）多くの読者がこの点を見落としてきたようである。同様の論評は次の文献にも見られる。Sheldon Messinger, Harold Sampson and Robert Towne, "Life as Theater: Some Notes on the Dramaturgic Approach to Social Reality," *Sociometry,* 25 (March, 1962), p. 108.

（12）驚きとは，ゴフマンにおいては相互行為の潜在的な混乱を意味する。「I（主我）」の創造的で驚くべき衝動性，というミードの概念とは対照的である。

（13）Cf. Messinger, et al., op. cit.

（14）*American Journal of Sociology,* 60 (November, 1954), pp. 255–266.

（15）*Social Problems,* 9 (Winter, 1961), pp. 120–132.

（16）要因アプローチは社会学において標準的なアプローチの一つである。それは次のような考え方によって正当化されている。すなわち，人間が，正確かつ明確に一度に考慮できることは限られているため，理論的に適切であれば，通常は，その人の関心に従って〔無数の要因の間に，取り上げる要因と取り上げない要因とを区別する〕種々の境界が定められなければならない。要因モデルにおける「同時的モデル**対**継時的モデル」の議論については，次を参照のこと。Howard S. Becker, *Outsiders,* New York: The Free Press, 1963, pp.22–25.（=1978，村上直之訳『アウトサイダーズ』新泉社，34–38.）

（17）目下我々は「自覚のない」文脈に取り組んでいる。これは，〔相互行為に参与する〕どちらの当事者も，相手のアイデンティティも相手の目に映った自分自身のアイデンティティも何れも知らない，という文脈を意味する。わかりやすい例としては，暗がりで見知らぬ人同士が出会ったりすれ違ったりする状況が挙げられる。もし二人が立ち止まって会話を始める場合，かれらが最初に従事する可能性の高い作業は，「自覚のない」文脈を変容させて〔両者の〕相互行為を

促進させることである。

（18）Melville Dalton, *Men Who Manage*, New York: Wiley, 1959; Alvin Gouldner, *Patterns of Industrial Bureaucracy*, Glencoe, Ill.: The Free Press, 1954.

〈訳者あとがき〉

Glaser and Strauss（1964）で言及される「awareness context」の「awareness」は，これまで「覚識」（宝月 1984: 104; 桑原 2002: 74; 片桐 2022: 19），「認識」（木下 1988: 281; 宝月 2022: 353; 佐藤 2008b: 20），「自覚」（片桐 1991: 29, 37; 山口 2007: 121），「意識」（藤澤 1995: 67; 後藤ほか 1996: 118），「気づき」（出口 2004: 218）と訳されてきた。本稿は，Glaser and Strauss（1964）の理論を人びとの相互行為を分析する視角として捉えた上で，人の知覚作用や認識作用を表す語を避ける点から，「awareness（aware）」の主要な訳語として「自覚（自覚する）」を採用した。その背後には次の理由がある。

（１）意識論から言語論への転回（Habermas 1984＝1990）以降，社会学やシンボリック相互作用論の分析的焦点が――全てではないが少なくともある程度の傾向を伴って――経験的世界における人びとの意識や知覚から（相互）行為へと移行していったこと。

（２）我々の見るところ，社会学に限らず社会科学において，人びとの心理的作用を指す「意識」という語を避け，言語的（シンボル的）に「気づく（気づいている）」，「知る（知っている）」という語義で「自覚」という用語を用いる研究が散見されるようになったこと。

（３）著者の一人であるストラウスは，『鏡と仮面』（1959＝2001）や『行為の継続的置換』（1993）において，相互行為と「awareness」との関係を（意識論的な観点ではなく）シンボル的な観点から理論化していること（この点については山口 2007も参照）。

（４）「認識」は伝統的な認識論において（程度の差はあれ）「心の中」との結びつきを持つ用語であり（戸田山 2002を参照），「覚識」は日常的に馴染みのない用語であること。

よって本稿でいう「自覚」は，「気づく」，「知る」という人のシンボル的な行為を指すものであり，人の「心の中」の状態を指すものではない点に注意してほしい（これに関連する理論的前提である，相互行為における他者の「ブラック・ボックス」性については Kuwabara ＆ Yamaguchi 2013を参照）。本論（Glaser and Strauss 1964）に対するこのような我々の立場は，グレイザーよりもストラウスの観点に近いものである。なぜなら Strauss（1993）は自覚文脈をその理論に組み込んでおり，本稿はその知見を踏まえて訳出されているからだ。その意味で本稿は Glaser and Strauss（1964）の翻訳の１バージョンにすぎない。また本稿は，グレイザーの観点や人の認知作用の観点からこの論文を理解することを妨げるものではない。

Glaser and Strauss（1964）が公刊されて60年近く経過した2023年に，この論文を翻訳する意義は大きく二つある，と我々は考えている。一つは，この論文もその一部をなす Glaser and Strauss による癌病棟の一連の調査研究（1964, 1965=1988, 1967=1996, 1968）において，グラウンデッド・セオリー法という質的調査法が明示的に産み出された点に由来する。グラウンデッド・セオリー法は，

後の質的調査法の発展を促す一つの契機となり，今日における質的調査法の学術的正当性の一つの源泉となっている（水野 1996も参照）。この論文において提示されるパラダイムとその一般的含意には，この点から言うならば，間違いなくグラウンデッド・セオリー法のスタンスが含まれている。それゆえこのパラダイムとその含意は，グラウンデッド・セオリー法のより深い理解に資すると考えられる。例えば我々はその方法的特徴として，調査者が経験的なデータをもとに，その範囲を超えて理論的にあり得る「行為と自覚の組み合わせ」を想定し，その想定を再び経験的なデータに突き合わせながら理論化するという，「理論的な想定と経験的な知見の相互作用」に気づく。Glaser and Strauss（1967）の知見も踏まえるならば，グラウンデッド・セオリー法を用いた調査プロセスにおける「理論的な想定」と「経験的な知見」は，どちらかが必ず他方に先行するというものではなく，両者の関係のさまざまなバリエーションを伴いつつ，この相互作用に至るものであると考えられる。それゆえこの方法的特徴は，現在と未来のグラウンデッド・セオリー法のさまざまなバリエーションの展開を可能とする知的源泉の一つと考えられる。

もう一つは，日本の社会科学者がフォーマル理論の特徴と意義を理解する上での，この論文の有効性である。我々の見るところ，日本の社会科学領域におけるグラウンデッド・セオリー法の展開には，フォーマル理論の探究と分離するか，あるいはその探究の意義を曖昧にする傾向が見られる。木下（2020: 19）の M-GTA は，フォーマル理論と切り離して具体的領域理論の探究に照準を合わせた。佐藤（2008b: 191–192）の質的データ分析法は，グラウンデッド・セオリー法を取り込み，Glaser and Strauss の自覚文脈を模範例としているものの，事例とその文脈を重視する理論の探究に照準を合わせた（ただし佐藤（2008a: 133）は，事例との関係が一方向的ではあるが，感受概念の重要性も指摘している）。また戈木（2006: 11–12）によると具体的領域理論は，調査の分析結果となる可能性が高く，フォーマル理論よりも人びとに関心を持たれているという。この知的状況に対し我々は，感受概念により構成されるフォーマル理論が，多様な具体的領域を分析可能にする点で調査において大きな有用性をもつものであり，自覚文脈は Glaser and Strauss（1964）で提示されたパラダイムとその一般的含意に基づいて構築されたフォーマル理論である点を改めて主張したい。そのフォーマル理論の特徴は，人びとの情報への接近可能性とそれをめぐる相互行為戦略（戦術）に照準を合わせる点にある（Glaser & Strauss 1965=1988も参照）。それは，相互行為に現れる社会構造とその発展プロセスを，「行為と自覚の組み合わせ」に着目して経験的に生じ得る諸文脈へと類型化し，人びとがコントロール可能な「相互行為様式」（Glaser and Strauss 1965=1988: 276, 1967=1996: 334）の形で説明する。つまり自覚文脈というフォーマル理論の意義は，調査者がそれを理論的な想定として用いることにより，相互行為における情報への接近可能性が焦点となる多様な状況における，構造的諸条件の下での自覚文脈と相互行為戦略（戦術），その結果生じる種々の変化と影響を分析できる点にある。

文献

出口泰靖，2004年「「呆けゆく」体験を〈語り，明かすこと〉と〈語らず，隠すこと〉」『老いと障害の質的社会

学――フィールドワークから』世界思想社，217–228頁。
藤澤三佳，1995年「現代のシンボリック相互作用論者――A・ストラウス」『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣，61–72頁。
Glaser, B. G., and A. L. Strauss, 1965, *Awareness of Dying,* Aldine Publishing Company.（=1988，木下康仁訳『死のアウェアネス理論と看護』医学書院.）
――――, 1967, *The Discovery of Grounded Theory,* Aldine Publishing Company.（=1996，後藤　隆ほか訳『データ対話型理論の発見』新曜社.）
――――, 1968, *Time for Dying,* Aldine Publishing Company.
Habermas, J., 1984,“Sprachtheoretische Grundlegung der Soziologie,”*Vorstudien und Ergänzugen des kommunitativen Handelns,* Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main.（=1990，森　元孝・干川剛史訳『意識論から言語論へ』マルジュ社.）
宝月　誠，1984年「シンボリック相互作用論」『社会学のあゆみパートⅡ』有斐閣，83–108頁。
――――，2022年『シカゴ学派社会学の可能性』東信堂。
片桐雅隆，1991年『変容する日常世界』世界思想社。
――――，2022年『人間・AI・動物』丸善出版。
木下康仁，2020年『定本 M-GTA』医学書院。
桑原　司，2002年「相互行為と合意」『相互行為の社会心理学』北樹出版，67–81頁。
Kuwabara, T., and K. Yamaguchi, 2013, An Introduction to the Sociological Perspective of Symbolic Interactionism,『九州地区国立大学教育系文系研究論文集』1（1）：1–11頁。
水野節夫，1996年「調査研究プログラムとしてのデータ対話型理論の可能性」，Glaser and Strauss 1967=1996, 後藤　隆ほか訳，368–372頁。
戈木グレイグヒル滋子，2006年『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』新曜社。
佐藤郁哉，2008年 a 『実践質的データ分析入門』新曜社。
――――，2008年 b 『質的データ分析法』新曜社。
Strauss, A.L., 1959, *Mirrors and Masks,* The Free Press.（＝2001, 片桐雅隆監訳『鏡と仮面』世界思想社.）
――――，1993, *Continual Permutations of Action,* Aldine de Gruyter.
戸田山和久，2002年『知識の哲学』産業図書。
山口健一，2007年「A・ストラウスの社会的世界論における「混交」の論理」『社会学研究』82号，103–123頁。